

岩田慶治 民博名誉教授を偲ぶ

二〇一三年二月一七日ご逝去 享年九一



岩田慶治名誉教授
 (『月刊みんぱく』1983年8月号より)

岩田慶治先生は、一九四六年に京都帝国大学文学部史学科を卒業し、同大学院特別研究生を経て、立命館大学、大阪市立大学、東京工業大学で教鞭をとった。みんぱくには一九八〇年に教授として着任し一九八五年に定年退官するまで五年という短い在任期間だった。しかし、じつはみんぱく創設段階から準備作業に寄与し、創設後も運営評議員として発展に尽力していた。貴重な標本資料の収集にも貢献している。

『民族探検の旅 第二集 東南アジア』（学習研究社、一九七七年。毎日出版文化賞）、『日本文化のふるさと——東南アジアの民族をたずねて』（角川書店、一九九一年）、『東南アジアの少数民族』（日本放送出版協会、一九七二年）、『草木虫魚の人類学——アミニズムの世界』（講談社学術文庫、一九九一年）、『コスモスの思想——自然・アミニズム・密教空間』（岩波書店、一九九三年）をはじめとする優れた著書をたくさん発表し、大同生命地域研究賞（一九九九年）、南方熊楠賞（二〇〇六年）をも受賞している。

わたしが現地調査をはじめた一九九〇年代には、すでにアミニズムに視座を据えた独自の文論をうちたてた雲の上の存在であった。わたしもインドシナ北部の村々に縁があり、西日本の野山で遊んだ少年時代の心そのままに、草木虫魚のさざめき、カミの息吹に感応し、「コスモスの思想」に共鳴したものである。しかし残念ながら一度もお会いする機会がないまま、先生はかたちをかえて、すっぱり「魂の空間」にいらっしやるらしい。

（編集部・榎永真佐夫）

片倉もとこ 民博名誉教授を偲ぶ

二〇一三年二月二三日ご逝去 享年七五



サウジアラビアのワディ・ファティマの調査村にて。遊牧民の老人、子どもと。1970-71年ごろ
 (提供・片倉邦雄)

片倉もとこ先生の現役時代をわたしは知らない。が、時折ひらりと現れ、「おいしいものを食べながら、おはなししましょ」と食事に誘ってくださるすてきな大先輩であった。楽しそうに語られていた世界一周の船の旅について、小誌にご寄稿をお願いしようと思っていた矢先の、突然の訃報であった。

先生は東京大学大学院理学系研究科で一九七四年に理学博士を取得され、津田塾大学で七年間教鞭をとられた後に、一九八一年に当館教授に就任された。さらに、中央大学総合政策学部教授（一九九三—二〇〇五）を経て、二〇〇八年三月まで国際日本文化研究センター所長を務められた。

中東地域をフィールドとする女性研究者の草

分け的存在であり、『イスラームの日常世界』（岩波新書、一九九一年）、『アラビア・ノート——アラブの原像を求めて』（ちくま学芸文庫、二〇〇二年）、『イスラームの世界観——「移動文化」を考える』（岩波現代文庫、二〇〇八年）、『ゆとろぎ——イスラームのゆたかな時間』（岩波書店、二〇〇八年）などのご著書とおして、イスラームを身近に感じようになつたという日本の読者は少なくないだろう。大同生命地域研究奨励賞（一九九一年）など数々の賞を受賞されている。

二〇一三年二月二三日、七五歳で先生の「たおやかな魂」は「最後のフィールドワーク」に旅立たれた。ご冥福を祈るまでもなく、きつと悠々とゆとろいでいらっしやるに違いない。

（編集部・山中由里子）